要馬秘極集　三・四

麻布大学所蔵

要馬秘極集巻之三

嗜用之巻 第一

心見入事為る馬公道口入家嚢に殺上るべし
よあらそ也盛に騎乗るよ法拵て撰案すべし但雪
よ通て紙子日中の暖りの我馬をとるとき
時て刺とり馬飛奔して或ハ縄鍬のふりけを
切て逃奔をくまるる脇家史
馬乃口人乃れてれをくるべ
似てあるものしんあるてのまを
鞭拵乃事為る法拵数人腕力とすて殺上
手地よ産するとしてとるべ大石数人腕力を
るしいとるとも振動ずるて強を綾繋ると撞突
巳し動撞をくて柔稜萬滝乃船とるとも海上よ
わらし一指をいて千里小奔行ず凡誠よ馬脊ハ

拜れ[illegible]さまとして大石綱紫指突ようこれ[illegible]種の
身入一指と以て千里小奔より同常より綱の曳先ハ
臂の伸屈と以て手[illegible]流ハ[illegible]手伸ふて一身と
て進退をつてこれを一ツにして二ツ二ツ[illegible]
一ツ[illegible]かへ掛ゆうこと[illegible]口傳[illegible]ゆ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]事ハ拘ハけいこ[illegible]時れ[illegible]
うへ[illegible]身に[illegible]
[illegible]ひ伝ひ[illegible]
[illegible]ゆへ[illegible]
[illegible]代[illegible]ハ世間より秘
[illegible]別て右の事り馬脊ハ伝稱の
[illegible]力[illegible]引[illegible]
[illegible]伝[illegible]この時を[illegible]
[illegible]

と以て[illegible]伸して一身[illegible]掛[illegible]は理[illegible]
[illegible]掛[illegible]ハかへ[illegible]
云ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

出[illegible]
[illegible]

[illegible]寸繩乃事[illegible]寸繩と云ハ另[illegible]
れ馬の[illegible]ハ[illegible]
[illegible]乃[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

馬のせなかにおりけるを木綿をもつて下腹をまきて左
右へちからを引とゝのへむしとゝのへ
腹巻紫乃事綿のにはを紫ハ紙をとゝのへ右れを細
紙刈右乃ゑをもつて木引をあつけむしとゝのへ
してをりをゝ処前を右れをもつてのをりをゝ
かを俵ゝ乃事あり或ハおもしろい紙をりてをゝ
の紙のをりをゝ乃事もを或ハおりを
ちて紙足紙を緒よりてゆいてをゝ
をゝ綿ちの事綿をよをゝ乃紙ゝ用をゝの或ハ火事
場かゝ越してをゝんをゝ馬鞍ゝ選して
行ゝ乃事ハをゝ綿ちれ紙をゝ乃てよわをゝけて
をゝちゝて綿ち綿ちをゝ紙をりをゝとよわをゝたをゝ
わてをゝ綿ちれゝて紙ゝ馬よゝ乃てむをゝつを
出ゝ乃をゝ馬をゝちをゝ馬をゝ

ゝ事ゝ乃ゝ紙ちゝ乃ゝ紙ゝ用をゝ事ゝ
ゝをゝ紙ゝ乃ゝ紙ゝ乃ゝ紙ゝ乃ゝ紙ゝ乃ゝ
すゝ乃ゝ乃ゝ事ゝ乃ゝ紙ゝ乃ゝ紙ゝ乃ゝ
業をゝ馬ゝ乃事綿をゝ馬よゝ乃をゝ乃ゝ
てゝ乃をゝ乃をゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

ゆりうけ移らじけ角て則ち弦紙移らうけを分
へ新鞭あるときの史或ハ之角ことすると弦とにして
かく紙わつまとしてゆくさ馬とのうてきまにハ
ちうのちうしぬぐひよ鞭異紙にて身紙てうてうけり
に後く鞭緩るぐ紙にうけぬまて移弱れ馬ちた大
うさ之ぬをるくものくしうかま後て軍場ゆにかの
てくゆうまるちけ紙にくくを鞭ハ乗ちうを嘉紙
にて恵脚ハ池義鞭考して好清にちうの史
鞭道京をりれ事移ちに一清打ハせにたて来をり
成うてりの史移ちにすうも鞭へ身とすへの
鞭ちるに時じふちたちうり移紙ちりてうをき
紙前の方へ移ちむけをうけうけ
ちうとをくちびのまた紙ちりうし見たにお
のまちう移ちりぐ内前ゆりたえれ馬よて

まて史を鞭身ちうれせに道ちりうへうまかく
のちくゆうてのうまを内をうちうの或ハうちへ
をちりを内をうをいのちちらぐへをうちに鞭
て鞭中をまをぐのうをうをに身紙をへたちへと
ををちの史或ハ前へをちうを命をうを右の方れむかう
いとたのをゆてうをに紙をうけ紙をげて身紙をうり
地場ちくして前へをうをりうをりみをうをりく掌
に試別をしうる形鞭史
身京すゆのハまを移ちに鞭まのうぐ内馬ハ刈船を
へうむけをあのちうを紙をを史をうををれる
ちう尾とをてを尾ハ中ゆを出を不ちうまを不
とをてまるをぐに前を入ちを一振ちに鞭紙引
をるすを今をを尾をて開ををを打命を振ちた
一を之をへをひちむりのくをゆをまをてをゆをうを

まくらまはしかゞけの割口として船中より引てとも
よ縄をうけ引てみむすびそのまゝべし或ハ小縄をさげてへ引て
むす時鼻口次せさくして鞭させりめまし八馬よりおどろ
きへうめくるきものし縄る時ハ前のごとく尾を以て下綱
とうくはり小引てゐをたとひちまざれらく云ま事ハ
かけのまくり口にて纏う八則繋中にて
をり立乃半縄るゝ馬荒しておくの手綱を以て
ひろくとりてもしと逃さらざる時々縄紙をもて左の手
ますて右の方れむすびからが紙さうらの木に付て頭より首紙さ
からめまとしとまりうるのく鞍先まてと肉らにて雛右
のおくるまして身をさうり地發ちくしてをりそて
をとりたらくよし或ハたれのまても方れむすびからが紙
それらまへ紙力ゐして右乃手紙ひのう首にかけとり立
ひらし或ハ左右に手綱をもすくにりうなあぶりとひを

あるひハ十二寸あるひハ大なる馬ハ馬より骨をはかり寸
るハ六寸七寸或ハ八寸なるもあるべし然とも猶とかく
世間にハ其たる拘る時ハ常に二寸より八寸までにか
べし寸と定めして其上八寸まで纏をさて其八寸を纏る
しかれども前の所よりとびとりがくつきにかりかるかけ
れども鞭が繋にそつて眼下よりつもりた
よ依て左方七寸八寸ならん藁をなしのへとか
出ずしておつなの所をもむきさ又を足下より乃ほと
さかもどしも眼よりも二ひろの股にとさてもれ
け帥纏すてんしぬめ左の手ふして右れむすびからが紙
紅手紙さが紐串とりくさうの中へ眼地場より
くさうり依てどのづくらり癖あくそりまりのせ
掛落し乃半縄るに馬上より手地の拘紙をとり或ハ
紙端をとれこれまり雛右の方までまくさまハ右の方乃

むかぶの紙尤多よてさうをしたる物紙をつ
流し尤の尾ハ絶をよみそゑ〜わげて
そびすめくわうたるけものあ尾迫と成て馬よそひ
繻ぐさハへすらくとさうぐり耳敢もくわげわうけいむるがく
いうてたのもとたるつぐり右乃絶紙流出ッ綾みとそべ
したる右目前のくあとのめすたる馬上ともと
れざるかこと結事なり
身添乃事綱乃ル馬上めてらぐ門を紙無事
仕理前ま向ぐむかぶの紙紙紙さぐりて年前ていぐ
紙つさ無ぐし或ハ尾角乃すこ
乃紙てこむけすこらぐへよたりて毎ル也実敷と紙
しとも紙事ハ世ぐこさ紙わ紙紙乃事紙紙け
出しめこ流尤右すらいこ毎ぐ右来べし右来
こり

ゆさたもつやこ乃紙物や盤のと
こりしめこさと紙紙乃事紙乃ル馬上ともて紙奥と紙或
引絶紙絶昇納乃事紙乃ル馬上ともて紙奥と紙或
ハ火事ハ急用の時紙ハ乃ぐ徒奥をもて紙もこくよ
納内事或ハ乃鉄炮又ものこ
草の乃ぐ指迫のこりしよ上の方よ垂て紙紙かこ
つもものこ乃と何ほどをもこいかこもあり
紙ものこ絶太力ハ石づこ紙力草乃ぐこ
迫紙へたこたけこびすめておこへ紙乃こへ
こあて紙ぐこめてこここみ紙ぐ紙或ハてこち
んぐここて紙ばこびぐこを紙紙乃ここ
たここみこ紙まけて紙紙紙こも馬上こ
紙すこ紙也ハ紙乃こ紙事紙紙こもの
同軍納乃事紙乃軍場めて紙奥紙納内乃弦紙

炮ハ石火箭波乃薄瀧乃掛絃紙引とゝよ紀ゐどにび
もび毛て止ハ流いとゝ迫高〻〻他力草乃下もちさ
しらむく継ゐさなとゝ右れ方れ源乃ちりてゆら
けゞ絲れちぐみちゝ継名ちゝ家のわとりれすう
に石ばゝさのへゝらへ伺のまゝ物ひてゝ物亜て
まゝあさめてとく爲〻かけちゞゝやさゝら
へや記いちゝ多ゝといゝ高ゝ弾鉄炮ちよゝゝてち
継長太かいちぐにちてゝちゝ或ハ継出太力と撥ち海
ゝちゝよいちゝいゝちゝ石ちゝちゝ
こみ鵜太の郷へ夢に継ゝけ紙ちさゝ亜ち継名に
けて撥よかして爲べし何背紙年よ紀亜也
義引ちゝかゝとの事紙ゝに軍場小屋毋漆ゆく馬
紙ほちぐゝ海遊龍馬ちゝりゝいゝちのよ行一年
と地よちゝてほちさ義ちゝ亜ちゝ一ちゝもの

綫尚ちゝ紙ちの草史馬拾ちゝ物ちゝてちゝ
さゝりかゝ拾くわゝ拾てゝば毋つゝ髭ちゝに
倣てわゝゝ事かゝ或い紙中ゝてもゝ紙ゆゝ
常ま馬毋ちゝわゝ事ゝいちゝ乎ゝちゝ
も記ゝ紙ちけ亜べし紙年乃年ま右二名
に同前乃理也
寒潮乃事紙ゝに止ハ岩ハよ紀筆紙すゝりちゝ乃
毋ま大屋に水とへ俳のゝ
ちのゝちちゝあちに槌よへ
にちゝなまびなゝ毋ちゝ紙ちゝ物よ
かゝくも
流者乃事ちゝいゝ紀ちけゝ
毋ちれけ紙わつめちちゝ
みゝ毋ちゝけ紙潮岩ちかく

同沓の事くまくもく火つけハ縕縄にて沓ハ鯀乃ゆきを
とるくてさげて其紙のめてさま上り乃け出合かく也
同沓乃事記もつさつけよハを縄ゆく沓ハ紙紙を
ちご一寸程つに切てよくゆき上りつげてち其紙以て
かくべし御とちらんづゝもすべし
同沓乃事細のには沓ハ馬乃尾を以てかくかり繩紙
里ちにそちりとりふとも見下にさらち合事ち紙
依て万里沓よ濁ごさそにゝゆのく出やま
て濡よ胡麻の油紙ぬりて宜敷べし
沓ざらもの事細のには長く簸よとをもさ縄くり沓ず
とまつ紙あでざ済てけ多て猪の油紙拵て沓をとうつよ紙
竹にてはふあうつ紙るの水らでよめく紙のもにけて常紙
らいべし毎度ぬつまて取乙す済まれれあて々沓ざらりあ
つゐとなるけ前細置ともにほ馬様ぶ済るくなり

やうにすべし縕縄よくうまにますおゝ也
よろいの鞦乃事細のに軍場ゆくよのらりて鞦をとりむ
持のくけよのろいなものおまて常乃おらくに鞦をとする
まれ撥ぬりあしてまろてまぬりの也常にめりすうして紙の
方よら紙手紙の縄紙の紙ちきそ紙を手綱へ紙ぐちむけてぬ
らけ弟紙うさ紙て鞦べしきつてきぞ刀かくさぐさしにら
ゆるか事かく第一草ざらりと发るもむ事あらし税立時
ハたへ紙くさぶけそとりさべし出とりさには依て鞦を
とんぐ紙形くちて八馬痛をの也おさとあゆあて落あり
ゑそ平八よろいて出ちてき紙時おどろくさのせぶる事を
ぞまくお眼てつ手綱紙おかけ眼紙かちさをとまらて宜へ
こゝ事にて毛也
馬面乃事細のにるよめんふかく面を支事を一筋すゝみ
出るまるか時けあにも也此めんゝぬくゑめんのして面とり

下へうせ並雑馬とゆて折りけ紙出ばしら欲乃馬
ゆうしらんて驚慣して作はりいぶるれ俗ておのづからる
よふ師匠して退逐ひとうえ事なもの史味方へ引
す時いそぐて敬の馬もおうもめれ
で味方乃ゆ同前ゆうり切けらぐやうりたの耶
ゆうけうしかけ紙と切てへ遠切けて
の有ゆてこうぜようけ新くあとで絵のおりてのび
とうしてそうあいうかりてりおくも雑絵本
の巻ゆうる
馬と繰當乃事ゆうも繰わていゆうるとふて加わ
うぐうもまりた事角ゆめて見いわつ
き表草と文ちすよ切てあとうさに穴をあけら表紙
ううてうすちゆ雑絵本乃事ゆうる移りぐりの
紙紙切てううてうすも同理史ゆうれ切移ゆ公

ゆうぐうさよ俗て解ゆうに巻ま馬上ておわて加
さりてうぐうもの事ゆる紙ゆ時を下紙を切てく
つうゆ事と面紙けむすびめて家角しけ下紙
よちぐりさぐうぐてさうよるゆ史ゆうる
刀紙めうさ角ゆ引うへし
ゆと乃稚うでめうゆ乃紙馬思ぐる方へ
き出引うりのゆうゆ遅くゆて八稚乃
うけうゆ事ゆ事ゆる馬ゆ稚ゆを切て欲紙乃方
げうゆ新く事ゆる馬切稚ゆを切て欲紙乃方
へまうさゆむ角ゆうよ家まりゆうのよ馬上ゆうぐ
同紙ハゆりて紙紙ゆ紙紙ゆうる角ゆうる上ゆ事新
一や紙ゆ紙ゆ欲のゆむゆうゆ馬上の稚ゆおわ
うりてゆ紙ゆうる新く事ゆ紙ゆに俗て腕ゆう
紙紙ゆの角ゆうく角史雑ゆうて乃ゆ角ゆうく並

しるしもよくしてめらさいこもせめてうけるべし
ものもくるくるくるくるものもの別紙ものの巻
別當之巻 第二
馬持様の事細かに常よりとりあつかひ紙筆
當公得の所安もし或ハ上中下脇と勘へ悪脇曲
乃繁不安様安草乃ものあづかるべし人ものの
もしもくの紙質馬心都紙ものもまへ日数を
煙り相紙ものの事可也或ハ悪脇乃馬にあつかひ
不朝乃ものもやらして出へもけさ口にはあさ資
草ものくるものの色てものべし馬ものハものもの
柔和みして相紙乃馬ものもふまわ
らざるものの紙見ものもあつかものの紙
色也世間とのあよ當るとハあるの者よ紙けう
ものもとハ公和みして馬ものを紙者に

紙くあ也紙にて紙にて馬ハ性脇弱みしも
ものハる紙基脇ものハ紙相紙乃ふお紙也曲馬の紙
ても曲癖も強て其色得たも所弱乃馬ものに
奥源くるものもの資草強くてものもはめく
色くも悪や紙乃下人ハ相みものもくるもの
紙わるハすべき事專當也ものもくるもの紙
なる仁毋庵さるものもの紙人出合と次第にものもの紙
さ紙色て盛乃人當にお含くいりもく紙脇
撒ものもの又當ものもくるものもの仁のもの出合ものもの紙
ものもの人ものもくるものもの紙掌に紙無ものもて相和
成仁出ものもいたものもくるものもの和ハものもの馬ハ数乃
紙と紙へ右乃馬紙かくものもものもの人乃紙ものもの
ものもものもの人當乃相紙ものもものもの
云事紙ものもの

馬飼ふ人の見て紙かけぬるより
然るべきもの
同飼葉吟味の事御馬に相応の草藁を吟味して飼ふべきなり或ハ乾草でわつさの粉ふるまぐらしの為ない嚙ぶ為ぬ様ならひおろし紙ぬらしおくべし
べらさまて藁業の○ぬるを大豆も飼べし
ケ月二ケ月ハ一度ツ麻胡麻いのこぶたを飼ふも
ふるまくたりて第一に
或ハ月上旬ハ鞍二三おりて耳ひわもこん加ふ
ら紙ハ常ハ毛紙をして
紙ハてるて其後ハ
ハ各別毛わるくなるものゝ常に飼紙もひ
ハ毛の事或ハ軍飼と用ふ
潔て飼ふべきもの

同血退水の事御馬に数多の馬紙あつるものゝ
ま常にあるべきと二間たてゝ
てゝ茶馬屋ハてゝ
則はるべへ引てゝ
ハ馬ハ紙ハ
馬屋ハ
右何茶ホ多めてて
人ハ大屋ん小便と
天ハ長サ一
ハくゝ
よ
重屋
同

石灰　青木葉　石菖蒲根　藍糟　赤土　剃水土　酒糟

右何茶ホ多めてて
人ハ大屋ん小便と
天ハ長サ一
ハくゝ
よ
重屋

[illegible]小便紙を[illegible]ていげのまり
間よりに石紙ゆませ重ね紙にて小便紙を[illegible]
件のごとくにして[illegible]馬屋より[illegible]
重ねすべて[illegible]紙にて重ねし[illegible]右の[illegible]
紙にて能くふるい能なるものの中或ハ血の[illegible]馬は
某の部とあるゝめられまして能すべきあるべ
ゝ[illegible]件の馬毛より引き重ねて行るる血[illegible]
[illegible]ぶ[illegible]事あり

[illegible]部と[illegible]て[illegible]
[illegible]れ[illegible]
[illegible]ハ件の[illegible]部[illegible]
或ハ藤路[illegible]て血[illegible]
[illegible]ゝ能部と[illegible]
[illegible]
おいてゝ[illegible]ゝ[illegible]或ハ[illegible]
乃事なるのゝ[illegible]に一火[illegible]
[illegible]ゝと梅干[illegible]
[illegible]毛数乃事[illegible]ハ馬[illegible]

或ハかさかとの[illegible]ゝ毛[illegible]
[illegible]紙
[illegible]

草毛駒毛　女鬢
右いろまゝ[illegible]焼細末[illegible]
の毛[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

蓮葉陰乾
右何茂ホ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

女鬢焼
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

同別當公始入事御馬に教ふる馬に或ハ先ハ人
の所領又ハ数ゐるをして求ゑる時節を勘考し
てなぐの御使を設ハ川筋所々に見定し常
よ法眼と仰て身体徒別にめやうを事乃ゆき
ゆうに公掛を色々事乃事紙家史當世の馬に有つふ
人々他労れおぼ〻武道不業用ゆるの所武偽紙
ひきやんぐ色々理ふまを或ハ家ふハ紙の色明四ハ
尾とのふ所おゆをして馬のゆりとのゝ金後して終り
軍用の使ゆるん事紙をゆをに馬〻雖をいてま
あべし警厳して役ゆをゆ〻紙ゆ時を馬乃雅と
のゝをして色ゆ不嘗ふ別ゆるゆハ不紙〻不吟味なれ
家よハ馬に代嘗して別當と名にく或ハ家紙ゆ
て十に及ぐ〻内五ハ陳行ゆ家相と当るよ求むべ
四三ツハ盛所ゆ〻てぐんてゆと尊要とを色〻四二ツハ

法脇大人めして法源国の名所の記馬に求むゆる
百よ及ゆ〻十ハ脇弱めて自古に馬と求むゆ〻四二十
ハ盛所ゆ〻てゆゆ〻ゆる紙求色〻四十七ハ甚脇
めて大人黒馬を求ゆ〻ゆる所家ゆへ〻
都ゆ〻ゆる所家ゆへ〻紙求色〻四十七ハ甚脇
名吟味の外當ゆゆ史
同後病と紀事物に常
事所家史或ハ人義歩に
引込ゆ〻ゆ時警ゆゆよ面
後ゆ色めめ痛紙ゆるす
遠き馬紙ゆて色へ引込ゆ〻ゆ人ゆ伝て當
ゆゆ〻ゆを後脇地紙者ゆ或ハ警ゆて汗いゆ
かハゆ〻ゆよゆ〻ゆ〻ゆ体ゆ依て或ハゆゆ
ゆゆを侍ゆゆゆゆ〻ゆ対ゆゆゆを後よ

かゆりして毛をすりめく炎紙をすり或ハ久敷あつ
紙をあせいまさかりうるおよ是く水紙をいて居る
は爲て馬屋よりふるくるに由りひを拭ひさ
て身ふるひすかしいつ
よりんそくとをつかつ紙水りめくまハめうとうい入い
み鈴よりへくも或ハ急用のうをて素をうもひう
まをうまあり用素ゆく後馬毛へて潜くるうよ
由りひ紙打糸振ひををしいつくもをうとはく
ますとをうさを後よりの癒炎をかす或ハ
あ草を鈴ゆ腎ゆ胸をうを打鼻を用をて
素をくふむりるをあをくを時馬毛をへふりくる
ふいもぐ後をりてくをめいくををぐまをを紙を後
深結馬と炎ふりのく或ハ朝夕年ゆ紙をて毛紙炎
と加方すへふるを打ふいをを紙をるに年馬紙をるに是

ほをく熱してん拭ゆ赤まをへし毛を肺の熱血を
して上熱しそをふくをやく熱血をり四紙をべ
し血引ひをを付水潜紙能をて引迫重へし熱血
くハ中六脉のををを或ハ目の大熱してをあ拭を移
の悪血をして上要しををを紙血しをを骨膝業
水眼脉元道九乃より血紙をりて引迫をを血て或ハ
居ふくをくを深をゆうれ後筋下ゆり血なをり
て備弟力形くん拭ゆを脾の悪血をん紙ゆを付
九道芳脉節張毫節年和眼熱してすををより血紙を
ゆをくに品を冷し重へし或ハ痰称ゆくなりて小骨て
うをうを四分を紙能く風ゆを見拭ゆの事をを
ゆをは心の悪血を腎道牛新紫水をり四紙ゆを毛
へしをハ耳の根弱ゆを而熱して後紙毛懐の筋
深をして毛拭ゆを腎の悪血ををを紙ゆをくをハをく

馬眠氣あつて呼吸とゝのはゝ又は鼾うやロとも齶地ゆく
あるものゝ中間の時を三穴藤波當穴尾中腎道ゝ
白ゆゝゝゝ常々馬の氣ゆめとゝんて或は胸子或時を
作寝めくも見腹鼠畢馬飛荒は白ゆゝ水ゆゝ
け冷ゝゝゝめぐゝ或は猫鼠みて鼠ゝゝゝ
を白ゝゝゝ冷すゝゝゝゝゝ或は
腹見れは狼の尾ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
常に馬は動鬼ゝゝめ或は病馬秘密の和歌

肺冷をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
心冷はゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
心臓をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

肺冷はゝゝゝ水おゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
腎冷ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
脾の冷をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
肝熱を目ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
目ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
心熱ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
肺熱を鼻ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
身にゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
腎熱をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

脾の熱はやめもひはなはだ
色のうちをんなうまきをすく
春三月四月のうぶうま馬はうまの
繩のうまきをすかのとめくをみん
夏三月五月六月の馬は四月もとれ
色をうまるるをもそのよき
繩はしをえをのためにくよりはをて
ちまを飼樂のるうまのひとりくり
秋三月七月八月の馬は四月繩は
養のうまうまの繩令はんうう
秋をやをは去もて樂をもうう
冬三月十二月の馬にしがべし
ほうのうまうさをいさて飼く馬は
同をを引はまてはぎすく生物

こくきとて飼て腹のうち敷馬は
うを舞紙たうまうをうぶうう
はやかの馬をや和をうをうをうう
業はぐまをはうはうをはうまげうひ
かいう馬うみうをはうをはうをれて
かさの出紙をはうをうをうう
水をかやは日中をうく馬は
のへのうりやはうをはうをみよ
目をわうくはうさわつく沖出て
わくをやくかの同くうの撫をり
千ありに九をうをはまをうて
ぐうよ四をはをはぐんはまうい
かんはやむ馬はは紙をまみはうら
はうをうをいでうをみをぐまうり

せめ馬ゝ三あ世乃数をうち捨て
いとされるやうかい屋うてをくだ
二十万五千一百一十六
ないなを都とらふべうと
馬乃無数三千六株わをたうく
ものすををして数をうりうり
三万千六千百数馬れいと
ゝ数を出をて作くとてとけ
勝ゝをりをねてうん屋をもかりうり
業をくていたうれうり高値
乃をうちに死めを邪魔をいる
業をとをくて乃ゝをうりをり
と言ゝやすを川いと勝をいらくし
大壮をうの人言ゝそいふ

作ものを馬数乃あ乃ゝを作をうて
乃ゝ業を乃ゝ乃ゝをうやうをうら
ゝをうを馬ゝ乃ゝ作をうを馬
ゝうをうを人城軍むをうす
かをにわをうをを松葉乃軍をを
ゝうを軍をを陣いてを言梁
業をを月おうを乃にをををうを
めいを瓜をををくををくいうて
鬱瀧乃作めを乃はを数はををを
作をうを乃かをすわをうをうを
ゝうを馬ゝをを無をを湯滝は
ゝをををあをりておをうをもをわを
そを飛をををそをを乃ゝうを打形て
ゝうを人城軍むをを作

はりむ丸みのあるものをかけてもるを力
のそれにてもるをすべて
激昂ふうに一りきくらをれを
すちをてみるをいとつけを
ものを馬たいとけけふいめをもを
まうちなくてもをてもるをを
わまをもをあをくにのをめくい
汗か嗜ををを馬ををを
柔ををををあをを物ををを馬
ををにあををり脾乃出をれ
加をををりをみかををんをはをを
ををはをををををををををり
人嗜や船をををををを鞍ををを
をりをををををををををををを

馬乃下ををををををををををを
をやををををををををををを大徒め
をを馬れかををををををををを
響馬乃をををををををををを
一里二里をををををををををを
をを先のををををををををを
かをををををは徒ま所く馬ハ鞍乃をを
をををりにを血乃をををを船へ
口ををく車をを船へ陸ををををを
をを船乃ををををををををを
をを船馬口船ををををををを
をを船ををををををををを
ををををををををををを
脇ををををををををを尾ををを

すいちくい汗いてはくうまそうに紙をたて
おさ物かかりかくうんいかりそう
こうくそんそかふかさうに乗紙をたて
れそうをそくむ祢獺そうり
惣乃分よりくうあるひて汗出る
物りそたまをとら物はてみよ
脾乃病ちうちんよ似てはくあるひ
ちうそおおまけてうにそうそうり
ちんそふはちうにそうちあ分紙そて
こ仏他妻ちくてうせす
ちんそふはうこ物りせんて畢そうり
せうそうきんにそうあてそうにそうり
ものそふはようこうも出ちくかうそふ物き
もうへうあつてのやこ白ともそうま

ひちうそて神にくうにむこあまて
いさまもぐさえて分紙さぐりうり
かうひやなもこ紙嚙て振そうは
ちんそくろふれ汗かのてうし
口乃うちうそうんちまそんそふる
ちまを命乃ちうと知今こ
胞物はちりけつ鮫の塩紙まあこて
こうはくそうにて尾とて変々分
ようまこそうさ草にむせるかいそうん
ちゆんそんに鮫わこふ今紀ちり
ちうこむせうこ紙つあこうもけて
茶ちんかうこうちりハこ仏
口乃うちうそ物わと変乃馬ちうこて
一撃いそふのとちるかつ

七月ハ中ハ五 聲ハ下の馬を
一ツ云いだしたるのとなるべし
たらくハ馬うし 気つかめるや
いわとうさ出いてこけ
春なり此秋冬ハ気やと馬
ちかくなりて此くおくふはうまを
肝ハ赤く心を赤く脾ハ黄なり
腎ハ黑く肺を黑い物
肝ハ白く心三角ニて 脾ハ四角
胃ハ月ニて 腎ハ十文字
黄なるうろ丹ハとしすてまれ
うるしのみてはよをけ
大馬と小馬よ丹ようす口伝あり
かくしていくらへ方

此馬血いみ うんまうに
風毒いんかくいむ
世気つくうとうの卯酉辰戌と
己亥に白馬 馬ハ孫さ
丑安ハ丑ハ日にあたれ九つめ
馬ハ引ひけ 日ハ
ちうしあ 朝血いみ強
風毒陰ハ
毒ちうハ 水ふ馬
気のうちう
なみさ肝 心 脾
胃すちかにあ ハ腎
毒ち風ちう
ちハ此ちう

若生は春の日来てそのちからをも
行給ふくほと来てふせくへし
うこりわれ脈は肺心肝の脉
しりは脾腎とこゝろえられ
しもいこむ馬は給さまてあし津く
あられゑうこゝのいこむありなり
うし経おし給ふ引あらしあらこゝとしも
あらねは下のいこゝをなれはなり
足のいこゝはなやもとの足をはなれ
うへさねうさせよくて経へてみるよ
給経きけは女さあまもせてられとも八
中略しなりと行りよ命さきなり
あくひ肝しりさは肺給よれ心
まゝらひ脾ふやくて腎として守

脱まハのあらく血のよりれ馬わらは
あぶらの給みそて燒淡すへし
冠はそれ馬は津めうけあくとられ
ちよりはくいきくもくあれ
ちうまされひへて腕なりていこむ馬
部んなり藥餘さやくりのべし
はめよりえさいふむ馬八ふまく
かうひのまいる針給さしすまり
て腹馬の津まれ藥いくハつせこや
そのんあぶらにしそとけいあん
ちこむ馬子れ藏とれちましるやも
小便のう血給すれもあれあも
ちく難くといふいとれ馬ならし
他樂天かいふは瀧津なり

さつちんとは千里行きる馬れうの
撥の名なれくせもち馬
駑くんうの撥ちてさうんあらうまの
又遠一駑馬ましてはれ
かくもる紀生死もちめるるます
ほうけのうちて地撥めそいるか
おぐてもうの紀くハ露のうれ
秋秀れ邂奥撥ハ
うぐうて撥ちのうくあるハをで
かもめの見にちと鍛撥
よあれるよハちう称ど馬れさめる
うれわの先きれるかまうか
同曲馬紀の事極ちにうの紀撥ちよ遠紀のるハ
う新遠ち倣て蒙痛ちんきう蒙撥して和先

あちんち事急先もべ紀内撥と紀撥してちうを
事冷水紀明服をれ事蒙撥の紀事也は業もて
常に馬紀あの紀法事ちいを紀紀てるちくれる
ちうれ紀よ蒙撥たちんぐくよまちうざ紀とざ
よ服れ事紀のち正教ちう鬼武人別のちれど
撥教ち倣てちうざのぐれた云事れ紀ちぐ海
ひ鍛をちうずまひ撥す海の紀くいかれちもうの
事ハは事冷水と度く服海ちおてハいれれく
退直すべ紀事ちうざい紀紀紀を事新強鍛
よちう紀用すれ極多紀あちんち撥業ちれす
直方の巻てうを
業援の事極ちに生人ちる教の紀ちて馬紀業す
鬼をちくを色ちうすあて事也一理ハ
公方れ御馬紀せむれちいれ紀の鍛と蒙事あ

らは鄙にうまれ出ぬる事なれば、
も無礼なる事とすぐれ侍りて、
その馬はの内に鄙にはなれ
べし。第一大事の物なり。一番は家人ぐるまの
まして嫡子に家人は常の色なれば、馬はしるさ
ぬ。二番は家人とあり。
乃方に見て物のまとはしるべ
家べきに家あるさむはは
け二見るべきにてなり。
鞍乃は形はよれるべ
して引物に或は家人乃前はに馬乃鞍は
心附るれば鞍とは
しかはせあるは乃事小鞍
也とは鄙流にはは家人は
と家事加はけるとなくばかりなる貴人乃向
より鞍にて是を前とすぐ内
和田事にはの家風
見はは記に内史或は馬
鞍鞍に馬乃場
方へはより鄙乃右
とはのにて一度
ある引人乃場
のはいより信
陣に貴人へ
鞍にもどせ
へ或は軍場
乃後帰乃
首にはは

の駈れ術とをさ廻てをどりいまり口乃内へ法さ色
しをわまりいてゆい物色をとをびをとをば
ゆをを紙をいてけをとをを

物見出馬之事 第三

物見出馬之事ハ物見人使者れ使ハを乗馬ハ使
て軍相遂すを事ハをを物見人使者れ使ハを乗馬ハ使
び紙ををいへをを一騎を之の分をして家臣を乗紀
馬ハはををを事又ハ紙をへをを事をばるの家
相紙ハて無をとをすべを或ハ家物てをを乗用
をを人時味方れ源眼解乃及結ハ一三ハ家を
ゆ又ををを方を林ハ切ゆもむをバ家をををゆるのをを
も入呪式歌方若労ハすべを地方をを見家して
又を西方西家をゆゆ物をべを慈愛をして味方
にを乃紙をを時ハ同ハ常にむを使ハを時理

を物見使者紙乃事ハ物をハ物をハ出をを歌
同物見使者紙乃事ハ物をを物をハ出をを歌
方ををを方を同を物をを或ハ馬ハをを馬ハを
へををを方に物をけを乗をををををを
物方事第一ゆ味方へ家物紙時ハ物をを物に変
ゆををを方を家用をを紙時に家をゆゆをを
紙事をを紙事を紙時ハ物をを用ハを
用捨ををを時ハ滞物をを早速注進事物事物歌
ゆをゆをゆのをを時節ををを歌を源
紙乃をを事物をを家を家紙物人使
者乃使ハ軍乃中を物ゆを物を紙物て敵
源とをををすべを或ハ合戦と物をとの使ハ物
をを紙ハ先ををを物をを物に使事をいまをを
を紙時ハをを物ハを物を紙を次第をの也或ハ室町

何くとせむれとりかとも聟畑国よおゐて外科鍼灸国
の揚弟とゆうごく無き事也然バ商人出家
ともどうひおゆまお両んまいふに遊評を鍼灸をもつ称
学力なしつきうらか急に事うとは深密りめ
つき乃なく或ハ小児治療惟様大小治ふるて指抄
色のき新語事ふ知をつけ欲依何様よしくかくされ
此委細ふ之んを成するが称要くまそ夜中ふ伏わ
状上ハ雲気も知るを腥乃数も数く見極れかし
国出馬乃うめ程乃に法勢乃列を作りそて将ハ伴
門より出て馬よ斎治ふ為二疋三疋すくませて先
治力乃出力状治状ふ為しを附る状束むさか或ハ南
むきよりすくませ様状べし或ハ軍中へ下持扣の
るす一よ布二よ宿業比分揺わるりて此病状治す
べき業　三よ馬病乃業并針灸療治仁色へつかるか

状以てや比ふ馬の治をやきらんづかうかう　一五よも
ぐさ火針つけひけ欲たいもり　六よ紋縄細引おうせ
より　七まり紙をきららごさ　八よ梅干かし　飯比分
密やの如く軍卿　九よまきとうかげらかき行り糸細
きをつきまさ　十よ胡椒生姜らんとくらべべ業と
めんにく見ハ頁うち時病にかゆをて行歩不叶
時うきぐきて病の出りにつくれぞそすらぬらやりう
ぶそ難らし永日馬ハ大ん状ハ業をり発熱とらん
どもり川浴めそらし大ん冰ま水を渡るし比足
かんでう状当として腑胴とこのむ気し鏡荒中
と好之朋ねつまりそて首まで状当とすへし草包
河原乃馬ハ逆上しなれを口の脈よ煙うしまかさめ
るハ眼ふくらうきずかうすらまた桶へ状以て煙
ふるとりれ腰よあうらへと以て此状持をるかる

なるべし　猪口をもくくるかをくくる
すべし　鞍ハ中身と如ことうめんにとりて石にさハ長
くすべし　力紙掛ハ二のこ長さハ鞍すぐなれそ
そん緑下ハ下ハそすぐすべし　鞍に下らんをそ
て掛よ法家ゑるべし　或ハ内ものよ七八寸程ゑる程
乃赤乃掛ようらん新ケ様にしてゑるべ
の不鞍にゑるひ御うゑ乃ゑて掌ハゑるのようよ
らん軍場よてハ赤ハ金紙ゑるとてゑてけんゑるに鞍
とゑめ立けんゑるめて掛ゑるとゑ新ゑんゑゑ
ちゑ乃時ハ鞍と鞍ゑるゑに鞍よはゑたてゑるめと
す鞍ゑ鞍ハ乃れ事なゑ鞍なん鞍く組物ゑの
ゑゑれゑゑて鞍ゑゑゑいゑどもしけゑめて物程ゑ脇
きまハゑゑ力強鞍ゑよゑゑ程ゑまゑ鞍ゑゑこざれ
ゑ系ゑん則ゑゑゑめごくゑひゑゑり

同軍場侍者心得乃事御ゑに立を図れ和合ゑ義場へ
使者ハ乃ゑ乃事法城場ゑ場へ不知合
立場ゑ武道不ハ乗なるゆへ乃ゑ場ゑ
よあハ場宅ゑ乃法乃ゑ場ゑ
ゑゑゑゑゑ組ゑ乃軍場ゑゑ方れ義
場へ使ゑ乃ゑ乃ゑ軍ゑゑ乃ゑて早速ゑ場ゑゑ
ゑ乃軍事流ゑゑゑ義ゑゑゑゑゑ家
ゑゑ人見ゑ乃ゑ事ゑれゑ
同人数ゑけのゑ程ゑに組ゑ事ハ人数一ハよ
あれゑ下紙ゑゑゑゑゑ人ゑゑゑ組紙
ハ百二三十乃横ゑて三ゑ或ハゑハ
時ゑゑ行十ゑにのゑ乃ハ下ゑ組ゑ
ゑのハゑゑゑゑと則時ゑ相組ゑ事ハ
ゑ三ゑよ組ゑゑ乃紙ゑゑ程ゑ八ツ

よきけれ共八分は十になるや此紙と成てかんと似りを
好きの比又人はお渡し此紙一さしつてれしかるの或ハ
家よりのがりつ紙てかよし中渡しをも内よ草まむの枝葉ハ
本ハ竹木石迄ても被よへ弁じるさものよ又ツ宛
八人よ渡しめまも其日く又八つは十くお紙など立のハ
さのと一ツゞ三ツにまく渡す事ぐの外しとの外なる
らば此理依って分別手事可為口傳
同夜中乃馬の事如りに夜中に家出乃事味方
乃不座をあるも則すくてり家にもむく事かん
りくに遠郷へ大勢りよ家本にぞく引かるに取
ハ味方わたりがく目お□ゝ也お目つをよくして
家出とべしいかんや馬をもいかなるか座かり
て噂たなもぐ依って中紀なしおとしてせぞ合
うにすべき事如く或ハ鷹乃合と依噂まうて懐

中しても縦よりし家をるし五分足かとも此名に依
くあらりて馬よ立よもるべし為て懐火玉光と燧
て鍛冶もよけくららし衛乃玉光依りて善悪とん
まけ引魚て敵あるも味方りとも出合るのゆまで
敵味方よ乃見えまけるつれよ縁ておやらさまく
郷ゝ附ハ世のふりもまして味方の勢中よもおい
るさき名依えてこえだ依かく引まこ立こてるおる
敵とん好べし
同相図心得の事如りに軍れ制令ハ賊不縁て也
大法図ハ出のなき鼓ハ行き旗ハ止八本乃之八人数依
まらの十又本乃中さゝ八先陣よりゆくゐ事依
らかるや情ハ将乃なる事よあり其依つくめて強情
金鼓貝旌旗狼烟と云旗弓馬合戦乃事くを家よ
まりてをいへども不響不正なるもぞ眼前れ理と

わきまへに嗜将そうてハ手ぬ様なものと感
し常に武道とすきを修ず肝要也大抵ハ修す
よわりもこ深く毎朝れ草まとめくむうおやう
絵図ハ万民乃心一意よりかくうむ分めくみよ遷て弟
命を懇く忠孝いとまの事なまよ絵ときを実な
るべしと

要馬秘極集巻之三

嗜用之巻終

要馬秘極集巻之四

嗜用之巻第四

馬上用付れ事絵ときに弓鉄炮乃事或ハ鉄炮ハ
大小ようしに用付大法乃事も馬上からぐ鞍
乃前鞍づまこの所乃事ハ鞍乃
ふくけを結てるこもの所乃所乃
の用うまへハ結ル所乃或ハ鞍ハ鞍ハ結しする
まへこうさめよ細き結縄を二ようにとりあすこれ
こうく結び垂て前鞍の用れ方ようへ引出
用の方よりまこ結乃二ようへ鉄炮と毎
外の方乃結と鉄炮のよう
別りでめこ用前めして
こうとも尤乃でにけ
むる前筒ハ前鞍の用へ

てうけむとくじめして出べし或ハ手綱打左乃方れ
志かそよ引とゆしこゝ手綱のまがりへ閊ゆとゆし
ゆ乃馬引むじ付こそ手綱ゆ持て肩ゆとおとむ引や
又ゆう乃同附ても同理也今とのさがりみぎりとも左
あゝるべし敵乃馬たおとも飛或ハ飛越すべし然る
附も則弓おとしそ肉も月気ならん纏やを座うハ
左とけ出し右打むくしそ鞭の志てもとらし内ゆそ
うくも用とうつして可打也口傳
馬上弓矢りぐい擬の矢乃事ゆうよ先とりうら事
打ゝ入向くのさうくあいりる手すべし此理ハ弓手馬
の敵ゆ肩ゆ付馬乃手前にうつのゆくへぶゆ手あに敵と
見定て敵よ志てつよくしとおくもとくべき其の理也或ハ羽の
付不細く根乃やくさおのさ矢ハ根手ゆ強く切と返
くらんるすべし或ハ羽の付不やくく根のりろさ矢ハ切

打わらくれの内よりくしらすべし或ハ太刀未細く
乃ゆとをきあまとさ矢ハ手の内切たつよ強く返すべし
或ハ弦ゆ太刀れおくうりてされりて打まゆさがりろ
の懸打ゆくぶうて之ゆかぶつら乃其内に我疾もひくべし
かくし鎧うつら鎧落鎧乃事鎧うにけ矢たるを掛ゆ
依ていうく肉矢打鏃乃用なるすかきハざるがれゆ矢
打ゆしらへていかく肉也是ハ気分間近く搦ゆゝ力ゆるよ程以
て也弦うにるよ竹打二ツ小ちうて肉乃よ打のくるて
さと射れ矢頭よ次若ゆに切て弦ゆよしめ其不切返
として糸ゆめて弦よとおうに程い射害て或ハとてら鎧
ハ鎧乃根矢打あて弓のしぶさと矢打筈乃竹れ
樋よりしらせつがいて常乃さやくいしとらすべし然附ハ
矢も常れでうくにゆるさ中のまてハ向まとゆうるとその
かのしゆハゆりまでも弦ゆつけてゆひく取りく節も

右のごとく如何にかくしの踏とりの八三人の矢ならばこれ
ゑすつて六本みな三人共矢は紙所と射
或はさら紙を射根紙をあてをるなれよりやをづれ
ばけ仲乃ひとりよりの世て掌れ矢のらくしりさうあ
いくらのすべてとゆよのせらあれ踏まて射る身乃矢に
う同前はしさまてだあしてようかりてまで拵をそ
の指とあつて射るものをうばや紙の時は縫ささとりかたひ
うぐうまでこて矢乃ひとり同をあめで
紙をまうつさ根紙をあしかれ矢あまて中よりふ
りさ根めくは常乃矢れ矢れのを
根計は中かりよう紙とたけ仲のごくらう行よ
のせていつ矢行義紙結ふ踏てをらばりつ行た
かけめてとかるあいくるりなら別新作のはま
絵本まるを信

さ面れをうるとれ矢乃事紙ならに矢ひをまりへ射
おくしいとるまま常ればくめて射わをまあ
ぐめるのを時よらへ射かをてを同代除する
稚を紙稚めもをぐるを或はをまりへいをば
ま拵のとに踏代ゆいつけを踏乃ばくを踏代
うれうを義をうを矢代をば仲乃踏と極はけ
めぐうの踏をりおをるををををまの本若乃
布よ拵いて変べ中の踏つへ変ろうはあまゆ
へ拵まひへの矢代をば矢代中乃踏代と
紙代同くをうれ踏とを変て紙をうをせて矢若代
おりへをををばを和をを引て射をかりばをををば
紙ほばを場ををうべくをもをへまりをくに射をば
をかをばけをを拵をを中をををををををを
三矢乃ば或はめを人一同のはをけををればををに変ばて

筈をとらへ押さげ射發せられば常乃月なりに射と
まり矢ずれば件乃端をはなれ内よりうくる也ぶ
矢ハさらゆくしりえ先へおもむき或ハ上へ射あ
ぐる事件乃中の端をはなれの端よりおさげて治
部し並也矢振ろて下乃端よりはなれの端を也
して筈振絃よりはて引きぬ又筈振上の方へとを
上引よりさきて射る時ハ中乃端矢中よりも
よ中めて矢振れかかるやうなく也鏑乃に縦て引
まるせば常乃ごとく月なりにあるべしとも
先よりとぐにもるまさ縁ゆの也本ハ押ら筈とのへ
る縦に射るべく此矢振又射放とる手不覺く好く稽
矢振とりて筈さ八一寸ずり上押中へよ衆とより徹
筈振りけてそさおとし絃乃かくらざるやうにせる
らうして行のなざさ又ハ本乃小枝振一寸鏑らきるて

徐乃矢竹れすの内へ掺返け枝としてそざらて矢竹
のほへ絃振をせ常れごとく射ゐをすべし縦時ハ件
乃なぎさハ道めておもて矢ハ引あたり上より來常
乃矢ハ其月前也或ハ射心をいてはざるる縦練お
るべし

馬上乃弓射る月射乃事縦ふ弓射るう大法ハ弓
乃縦振むらる居發振ある振ツさ弓手へかゝりて引
くしぬちさ川ごとし鍛錬すずるべばさ乃本縦ハ
縦の弓へかりすごして射るより以ごとし鍛錬なり
うけ射うる時る振あこぶ風りうて鍛矢振とるす
とれんじ野く引むけ置て或ハかまへもりあてるとれ
さもの振射る事ハ前端事てぶしと押あて射るる川
ぶし或ハ處ぶろうへさうしむかいてさる越るの振射り
事られ本筈振右乃内ざさハへ働きてらえ振先乃

のざるへ押さげ引くこうるへ分かつ引くこうるへ
引ぬ或ハうるひうるぶ引ぬあとのけても射也ぬ
て擬さハめれるこい弦引ぬて射るもの或ハうるの
よらいて射るる所事急るる時ハ矢ハ二本三て時
服ふくこうるけめ六るへもうるてるのをて乃
うけめてうるのひざ引つこうる右の足とうる物こうる
めをて射也欲る矢ハ左てみわるうてめるるもを
へるうるる或ハ射根ハうにみぶるつてるへ射也うと射るかよハ
ぬすれ身るもハ弦射ハ射ハうるるるるた右の射服よわさ
つるるぶいるこうる鼻さまわるうぶ引ぬ分ハ弦ハ弦ハ
の六事こうる云或ハ引ふてうるるものふハ弟乃中ぶハ
つるを国わてる射るるるぶ引ぬるるるてるるるるの
云ぶるのふるを国射るすべ或ハ左ぶ引ぬるるへわるう
ぶるのひざハ国わてに射るるすべ遠くたい心物るを

へるる也事ハるの国乃事ハるの国ハるるるるるるるかけて射
射ハるの国をにるるるるるるるるるふるるるるるるるるる射る
ふるる矢ハるるわる国ハ射屋ふるるるるるるるる射る
るるるる
水鳥射中の物ハ射事流るるるるるるるるる矢
細くして根をるるるるるて蛇の尾るるるる布ま包矢ま
めくい射押るるるるるさるへ押るるるる射耳乃逸
ま流縁るるる射るるるるるる或ハ矢中ふ逸殺るる
るものを射ふふるるるれ右乃方ハ服ハ射るるるる紅
て甚服乃ハ射るるるるるるるるるる細く切て色彩
紫紫ものをるるるめてあるるるるるへ射番ハ焼て分ハ流物
流く心流七逸八幡大菩薩ど西逸るるるるるるるるる集乃
尾ものるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
いへまるめへるる矢ハ弦ハ 元 ハ蓮宮とるるるる三物

して朝夕に水調和三日精進日々にかりかたり
右のごとく取合しのち（添三位相模守殿）
ふうもしは矢ぶくと云伝又狐つきなどかるよ形に寄
物の口傳
合物として酒に懸中に事寒れ用る調合
魂節散　蕎麦粉　五合　生姜粉　五合
右一味を古酒三升　とろとろ一本まで合て古入
一味の粉をうつあてて漉て八千右に中入酒に
瓜ゆつけりうつむくに紙粉あて又いまりあて
もとくに用ふ時ひさゆの中へとくてのむ事
んを一度用ひめまてさうまに二つのうつるむろ
ひて寒に親代のさ第一水毒に去事を懸中
し軍場にて用ふるあかくれてう
張路よりものむ事或軍場にてかくれてうの下人よ

急まて寒て寒邪さはらし系入り
延歩丹　防風　薄荷　白芷　細辛
右ホ分めてよくく細末にして油にてとく
練りて足うあつとうまりかくうけて付るく
うつけ紙ちばこにめくりて毎朝茶にて
くく常に十里あるとも十人里の自
出ふりて足癖不る繼ぎ合をぐ時は
ちまの油紙めりてもふたくはつるる
軍場にて食事能ふ時は茶に用ひれば
ちくうる茶方
養毒丸　人参　一両　麦門冬　一両　女松　十両　白朮　六合
右細末して練めてもめて●是行を丸て廿粒て用ふ
又方

串柿　松のあまりの暮苔あらく移り丸して三十粒ゝ用ひべし　保茶　搗て用ひ粉みて　麝香

又方

保茶　一斗　白くうてそうけうそうあるひすてゝ三度ゝ百多ゝして一日と清ゝ水にひたしてうりゝ

糯茶　一斗　右酒三日よりてハ力ゝ出すゝもあひすゝ

茶茶　一斗　右酒よ三日ひたして後百度ひして百多ゝうす

右調ゝて寒ゝ時ゝの保茶ゝのうちにてうめうす紙ゝ　●　是程に用ひめ毎日或ハ食をくらひ時ゝ食をくハ湯の中へ

入度ゝけて用ゝ一度ゝ不いき餐ゝ行ゝ

ゝ十日ゝ日ゝ用ひ紙ゝ

又方

赤石脂　三匁　白茶　一斗

右行義ゝ丸ゝ不よ三日重て

ゝ上ゝ白ゝ丸ゝ其時つゝ合　●　是程

ゝ丸ゝ水保茶ゝ紙ゝ粉ゝ

服ゝ

鰓剛丸　細ゝ丸ゝ茶ハ腎湯ゝ煎ゝ

ゝ乳ゝ時

積上氣　睛翳を治眼ゝ

ゝ　憩癖憩脛を

ゝ毒水毒ゝ

ゝ急時ゝ

ゝ底ゝ

赤虫 白子 十匁　氷餅 四匁

右赤虫ハ六月七夕に取て鯉尾勝に成る骨のろ入
煎用ゆべしまたは酒に一和ひたして日にか
ゝ骨ともに細末たいらぐ米ぬかのとぎ汁
● 是を丸し大唐粉と粉末にてまぜかく
ぬる事堪よむしりまハ毎朝十粒づゝ用へし湯
水にのみてもよし

又方

天門冬 二匁　熟地黄 一匁

右細末して蜜にねり ● 是を怒じて常に温酒
のみくだして三粒づゝ用ゆ其一日に三度づゝ十日
用ゆ其内ハ酒ハ用ゆ日服して百病いゆ紅色桃花のごとし三十日用て
白髪ハくろく歯のあらハ新くなり

まゝらうひあり〳〵ふ十日煎して奪馬ゆもたぐく
ゝらゝらゝ百日服して年延る事疑ひ

第五

金瘡生死見分之事

生ハ血ハ鮮紅色泥細右緩ゆるして若
早ゝ出血ハ指の下ゆ流れ出ハ三
度の内ハ保ハ右性強き者ハ病の不起ゝ
ゝのく
死ハ血ハ冷肉紫色虚汗目とゞ不開氣分美ゝ不結脈浮
濇沼大数疾角反張ハ血しゝ

神祐七聖散　血散　胴込用
人参　川芎　當歸　氣竹　地黄　茯苓各水分　青木葉　芍薬
右細末ノ茶一服行ゞ湯と塩とゝ入用ゆ青木葉
八六月七月の内ゆ取て用ゆ日光ゆ不成庭のまハ

又脱毛ハ右の薬より藤粉少加へて用ゆ童便と引口薬よハ芎藭のまやこ加へて用ゆこぞりハ天南星ハ加へて水にくり用ゆ疵癰よハ柿のうら乃黒焼と加へて付ル也疥癬よハ天竺黄と加へ癰留ハよハ車前草白蝋黄を焼加へてほ梅のすハ引

右常乃薬撰也

右加減之事

茯苓ハ乾姜より脚気よハ牡蠣と加
後円ハ青木香と加
頭痛ハ後酒物黒ハ茯苓と加
鬱ハ乳よハ茯苓柴胡と加
狂乱よハ茯神
血老よハ蒲黄紫胞
脾乳よハ大黄ハ芍薬
血閉よハ桃仁
小便閉ハ或鬱有ハ葛根黄芩
大便結ハ出よハ麝香龍骨
小便血下よハ麝根 烏梅
脚よハ血蒸よハ柚核牡丹皮加
打身よハ藕茎ハ花

又ハ紫胡と加 杜仲中 麻少加
手 尤よハ藏霊仙と加 右よハ桂心と加
手足ハ氷 内人参と倍 氷鶴と加
内甚よハ茯苓胡と加
口ぐちハ遠志
大毛よハ分そのと酒玉葱白
節乳よハ蒼蓬
血堅閉よハ桃心
小便閉下或鬱有ハ葛根黄芩
痢癰よハ沉香連翹黄芩
脚ふられ緩ふ槐花 枳殻
冬瓜瓢或痩乾古疵乳香

鼎新方

白朝散 金瘡產後打身鹽疼痛一切皆此方与也

人参一両 木香一両 陳皮一両 茯苓一両 當歸一両
芍薬一両 地黄一両 白檀一両 大黄半両 沉香半両
縮砂半両 藿香半両 白芷半両 川芎一両 甘草半両
桔梗半両

吐逆には白梅花
虫には莪朮木香
痰には半夏瓜蔞仁
ゑそらごずには黄連
腹痛には地黄を倍
骨切には虎骨
骨皮肉切には虎骨虎肉

頭痛には藁本 細辛
痰には独活 防風
疥虫には黄連加白芷倍
こずたけ 付 かと深き[illegible]天南星 黄芪 人参を倍
口瘡には大黄を倍
皮肉切には虎肉
腹の痛には血溥と用也 [illegible]

血止の方
土竜 蒸焼 丁子 各等分粉にして茶一服独活湯にて用也
大虫菟にはかねにて用るもよし

同方
鹿角を七日水につけ日にさらし白焼にしてこまかん
鰻を十分一入て蒲黄焙て鹿角の末分量へ細末入合
つけ[illegible]也

同まじない
新紙二枚に杉文杉の[illegible]にかく也 新紙を[illegible]あてて
血のみちは父と母とのちのみちよ
そのちをとむれちのみちそ
かく三返よみてこの紙にて疵にあてよ

香附 一両 蓖麻子 一両 細末にして酢にて煮こね
赤鍋の古ささ 二両
淀香 五分
右細末にしてそくい合せ疵のうへにつける也

又方
大鍋の古鍋 錫
蓖麻子
各等分粉にしてそくい合せ疵につくる也 是は軍場にて用也
手負たる疵を白紙にて一日数度手にてとり
紙以て疵をとりて疵の口をあてて日のうち八の間に年合し

て鑿目の鞍ほとて史或ハ馬鞍ゑ鞍ゑ右同
前くはかゑ鞍ゑ用史
袋鎧の事紙ほ芝ハ鎧掛の鉄炮掛ゑ乃事ゑ或ハ
ゑ用ゑ紙ゑ鎧の長さ一丈か一丈二寸ほ長さ
せ目あてゑ鎧ゑ用めて火ぐさハ鉄炮のとか
くゑ身てゑふゑ火ぐさ乃さのくゑめてゑさ
いうちゑせぶゑ史紙ぐらゑ用ゑ用めて
ゑめて鉄炮とハゑんぐさ乃ゑうまゑゑゑ
史ゑとゑ史めて九くゑ用ゑ用ゑ用ゑ用
ゑ火ぐさゑれ和ゑもゑうけゑぐゑのゑさゑ
てゑんぜゑてゑあゑゑふ拍ゑ右乃袋ゑゑす長
さにゑさハゑゑゑ乃へ紙のゑゑゑゑ袋紙ゑゑ
中紙ゑゑゑ紙へゑ乃ハゑゑふハゑゑへゑゑわ
さ紙乃はゑはゑ紙ゑ細紙ゑて結いゑくゑ

らへ史鉄炮乃袋とハ鉄炮の袋ゑの乃ゑ
紙ゑゑゑてゑゑさ紙ハ五寸めてゑいハぐけにハよ
くゑゑゑ物ゑゑくハ二ツ乃袋乃ゑゑ上ゑ紙と
ゑゑ前後左右へまゑりゑさめゑゑゑゑでゑゑさゑ
ゑ袋へゑゑ紙上袋ゑゑゑゑゑゑ腰掛の鎧紙ゑ
ゑ史或ハ紙袋へゑれ和紙ゑ紙左のゑゑて結ゑ結ゑ
さ紙紙用あてにゑてうゑ事ゑりハ紙第結事
よゑゑ紙ゑ
扨矢乃事紙ゑハ矢ハ細矢の結文ハ小脇掛紙矢
乃根ゑゑてハすゑ方ハ一丈二寸結ゑほゑ史紙ゑ時
根紙七寸ほ羽中五寸ほ中節紙ほすほ切て
掛紙かゑのゑゑてゑゑくゑ九くゑぶりかゑすゑ羽
ゑてほ四羽ゑゑてゑくゑ史ゑ紙紙ゑて結離録ゑゑて
ばとゑゑゑくハはゑゑゑ事射ゑ矢乃ゑゑハはて

第結本はわり付ける繼乃事ならんなら常代常
ちり結ぶくして細糸紙をとそのうやハ刻ちるうち
巻れとそこにして糸ちるうちの下乃方ゆて繼つけ紙して
紙ちくもとそ代ちうこと絵本よるこ
畳海番乃事絵ちるにはうこ巻ハかこるちれとも畳
場急用乃時是繼百人よこちらくちとまで一人
よ対一日に三ツ乗ハ出ちる物也繼ち時ハ百人へして
三百人乃巻ゆてはこちうこ巻ハ行ゆていひ紙ゆ
ちちちる物代ちうちゆ繼てちうちゆ
かよれこくゆて三百ちゆ糸よて繼よ対百方
ハ間代せちくよせてうぶ間で極ちと紙ちて
ちちにちちちてまりよ絵と対繼よ海り
前ゆて合せ俵乃絵紙引ちゆ端の方よ極よ
て三人ハ抵ちにちて巻代対ちちゆ後ちゆ下巻れ

こくよ前へ引ちちゆもとくもゆて代巻よう
ちちにちゆ分乃ちゆちきうちゆ巻代
本前ゆ代ゆ代対寸方繼本てあち半一うこつちこ
俵樽の乃ゆゆは
巻巻れ事繼ちゆは巻ハちちけてハかちちゆ巻
ゆちちちゆ前ちて代ちこ事巻ちくちゆ
うちんの乗味ちゆ巻ちちゆ六角乃ちちゆ
ちれ紙ゆてちちゆ巻ゆ海ちけゆて
樽樽もちちゆてゆちて三百あちて繼乃と
うゆ代二巻ちて右乃ちちちぬちけぬい代
ちちゆて水の巻代ちちすくちゆ事樽ゆ
巻代樽は右乃ちちゆ巻ちゆ一人繼り巻代ちくぬ
ゆてちちゆちゆ絵下巻いつ巻ちちゆ繼巻
乃ちちゆて代ちけちゆ時ハちちゆ海乃巻代

て引合せけ法ゆえにて板いろまの面
へ下帯引とりて引けむすびくゝりけるの
しまくるの事仕業用ゆゑ船作のこと
しらへ作り金具へ付て常はたゝとくゝす則て
うちんのごとく組ま作てうちみ新の用め
も数多ありなかなか絵事はあり
鵜飼船の事船まは溜水船は下地ハ分もこるに棚板と
ひてゝ接のまに分こうて加紙の
てうたぶの外一ぬは板縁うちゝ巻わりて地彩
ハ漆まてぬりけるこうらん絵くわりて目多なり
ちり絵絵事のこと常ふハ二ぬはたゝゆへ
ちりとさ自ぬは紙だるさたくみ作ること
こうらゆ多るの品
鯨海の事船まは溜船ハ品くこれるこうへ紙事を

沢才撰考して数州と波しゝ海よりて或ハ入こ多い船
異ハ此ハ多く海作と所ゝ海と所作ゝ海道の船ゝ同
系や事ハ水早と一文字ことこるの形ハて寄船ハ水
早ばくゝ巴帰ろうよりハ此ハてゝ山岩ハ船海上ハ
日ちゝちゝちゝいまてこめふまあゝ岩こうら
へのゝハ柄の板あつさもづつわけて一分ハ何も
同系ハ大板ちゝやすまして出さ七寸五分ハ板上下
に細ちゝのこうんあり中板ちゝ二寸出さ七寸五分
や小板ちゝ一寸六分みて出さ七寸五分右二ハ乃大
板のこうゝ小板三毎ちつくゝ十二通りちゝ上下向板を
ま三十六枚熱板数大小合ハ十八枚ハ右乃板何も
も布紙さゝて作ゝ法まあちて右の板ちゝやうはがい
ハ何のまに義ゝあゝ皮まてゝちゝはけうゝ作しあてゝ
新泉ゝごちまゝの輪ハゝさゝの板をぞるゝ下ゝまゝ作ゝ

よ成箭乃すさめしてさを文都代さをせうくわりて
ゐさ八すまりり二人更紙さを矛加りうにしなへ
しとトめてすこう右乃はゐしるめらちつけく
めりてをゆ紙ゐくたくをゐしをらめ
乃ちはゆらそうと一方ハ火けづつををの方代ゐらめ
あてうるはけめしてをとまを可やうとうりう
右大板のたたはよいさ出しの穴矢の竹箭
ようめてをべしけうきの沢矛結ゆまを下乃ゐを
んよト弟とつき毒更海とまを不入時ハ矛よ射てた
ちんぐらさぐりれだくくめて国ま三寸ゆ水中
へよ沿て知ちゆ沢やうくよ為てと乃引法
弦引ふむるゆ矛一国魚ゆめ出緒界川乃根
備弟寳授用集よあらり
浜見乃事紙ま雅浮其不浮岩のあらさ更ゐ兵鍬

さ以てさやちんのぐくけてちやうたいよは備を
内乃方ハめいうけめして左たハめいうけるはちやう
たちいハけおたは内ハをふらふつさ引時いたたの乃ちぐい
一文字よ初ちさてあれはくるゆ毒鍬更結ゆに
ゐ口傳
鍬船乃事紙ま比弟ハとらをさ自はめて技紙一つ
ゐ内へ二そう入ゐり一そうを二人乗くめぐつをの技と
をそうらへめてハ内又めて一そうを紙人まてハ鍬と
と乗更比船をゐさ弟ゐふこををいんぐを新ゐ比
紙ハはよさ事義年えをゆるをの更呪やこ
ををさふけをぐ新かり或ハらりさ
のろうら板のたオうらぐうのちんまちうグ弟結
一更桐の板ゐ更よめりてをはゐいるめ皮をはく
ちちたけ毒さたそを則皮ゆてたくくたぐこ入か

どのけぶりのごとくふれることなく史仏まで内外ちがう
間しまてくめらをくべし或ハちがうけくいの所とる
孫よくこうぐこ間乃方ハかるをめくくちらけく内事仏
ハて濁くけ事能永史絵ハ
水鹿乃事能よ堀の鹿仏ハ
歩の間形ハかくこ
ちくよ也可能ずやこうらく乃事間れてらゆりよ
ても女のうちうぐ也こがいへわくこ能ふう孫ものめた
分能よちけしてこまま技能めいけけ事はう
くけれぐくめいて下常のお乃所よ袋先仏ハ対
仏能の人ハてめいめも熱能ともにうるこまてめ
てこの歩も能へ鹿うにこらくの孫のちに
能ハけけ間よ抑ものうこうこまてはくゆいく
ち鹿へへ史鹿う孫のふらけ間よこ
あてみも遠こ

れちこ鹿うよ食てこうらゆちめらこくも方ハ
まこへ乃おりてふもわふ鹿うよすべくこめこいす
くすまわりてこもうこうるくこはつうくこの
の澄義こ仏ものこ也と間よわちふ所ものもちこは
方よわりくめりて桜面よこうこ抑ものこうこめで
ゆくくこ鹿へへ史こもこちハ仏れくの毛ちめも
こくつこて人乃おりてよハ能仏てこは能ここの
ふまこ能くくこ所ここ毛めちたこふ仏ちだ
くはまふゆへおめてもこ水乃へけいふくゆ或い
石仏ちだこ仏ものこ仏てこ所こ鹿へ
へ史絵中よこ
焼史水の事能よ軍揚ものめてこ地方ふ鹿て水の自
中界計時こちこ仏こ能だこふよハこ草作ものれこへこ
所こまこば年地こちこ弱こちこ出鹿くこうこ

乃ち手縄でうちあつさ六人程ならんと思ふ
ほどに一つ四人程まわりて井のもとにれば
してちりうう穴乃ち程より作めて藁にて
そう編よりてまことに作れば井はあしけて糸をさたれ
こ藁ですすきれば切合物の作乃藁にて編めりて
とりてまも作れば四方よりけ或ハ縄にてまもけ
てそう編もだわりまして板物の穴の中へいれて縄
そこ紙へ入れまくこと乃を穴へあらすべき藁より近
きこの草木のもとさ板葉又ハまくの面ふりもてう
物ともらるべもとりもまでて縄よつくうこ中
つまてまくこも板物時よりかの穴乃藁へ入くよおろて
とこもゆふ物へ入れまくこ中入乃面
ふ面に井乃もとの藁より入れ穴四つの物に
て四方よりうくまよ引わげ中ようげとこて板穴乃

上に作ぬてまこに作まに藁にて方より引わ
げこふ縄ぬてこ作まてもまくゆの縄けて草木
乃板葉にてうこまこに作ちまてわりあれ
いこ乃物こうふあり迎こくこうて板こ地湿ふ
くこありこに作ちこ三四時重てこうけこう中
乃方に作たここ内物ともに引上こうまこ中入ここ
つまふあたりまてこ物地又云ふ或ハこあらなな
紀ちこうば大時六時こてこうまこ右の面こうの出
てこ面地水のこ作手こ作ハ彼中へこ作藁の
物に引上こ作ちハ地の藁にて三人ちまこ三
人ちたりふあ人ちまこ人たりゆへこの引上
こ作ちハ下までの縄ゆへこの縄よりこ
穴人生ハ乃ちこ作たこ加火熟乃せ
い作にて地こ引わ物ふ作こ乃紀不

あてもしるしをかくこと事なり　表に絵本は
とりとくべし
悪てうちんの事御よりは竹ハ竹ハ
あるは或ハ悪びうれ時をもつて
又をもしわるるあるるは竹ハ細竹をすく
大方絵屋のごとくふさにうるはしくとまる
掛物一作出よりあるうめて一方へ移らまりをぐ
さをとてさうぐらやうふるうるはしくあるは
ハとはりまてたるくはるる紙行末の枝あてもに
あすよりとてさう迎たるの宮よりをかるとるす
なるをうちうるをは或ハ竹ハ細竹を完
うちんを迎てもをるを懐中すべしみて
懐火乃事御よりは胴の火を松明懐中して悪
び入てんぶるのためは或ハ軍場あつびのりをさうを悪

不紙ハ紙のため懐中をるるをは竹ハ細竹を九竹紙
よりは或ハ火をすもすべしは行日寸あるて二つ合く
一つよハ中にをそ紙をり火氣を和一つよハ火氣
なるのするをくは火氣するを入行よハ胴の火紙
紙をくをるをあるてはまるを紙行のを
の不紙筒先よりてはるをとをるをるをるのを
しををわるの梅をるを紙行ををるをるのを
あるをるて竹をは竹ハ筒先紙ををを胴の火を
らくををうを紙をのをるをるをるをるをるを
筒先紙をををるをるのをるををるをるを引いるをるを
松明も右日前のをるをるへをは絵本をを懐火をるを
火の玉光悪のををるをるをるを
胴の火乃事絵よりは竹ハ紙布日編水よをを
を後かるるのごとく焼てはを紙一紙をるをるを

てさしかけうつくしくさしかけうつくしくして右のごとく
玉光の事光は懸火と一つに懸中にして附用紙
をふかせし事方
樟脳　十匁　硫黄　八分　鐵炭　四分
右は肥松のみ紙並にて細にして沸湯にて練りかためて
光沢丸じてをくべし丸の一分は▲光沢乃
硫黄紙にさしかけて付置べし火付の口薬
は玉は紙一重上にもつべし火付多きは紙重けず
てのみなるべしかけ方は自然多きは
同方
樟脳　十匁　硫黄　一匁　胡粉　一分
右は右に松脂並にて練り合或は丸く又は一
人程ずつにしてこれをつくるべし
同方
塩硝　百目　樟脳　百目　硫黄　五十目
二匁五分
右とんぼうの目玉に者火合よりとんぼうの者火を
うつくしく時松脂は十匁一匁は黄色にして一つに
合或は丸くつくべし
松明の事は松明一つにて三千人の軍場をあ
くるべきよりとなる史侍
雨松明之方
塩硝　八分　硫黄　十匁　灰　六匁　樟脳　八匁
肥松脂粉　八匁　蓬艾　十匁　苧くずを多分に古松脂　四匁
蒲黄　二匁　但右所とのこりて　拋藥　六分
右竹の節の中へよくさしてを竹紙落紙にて付け

ばりて色の沈むまでよくもみて用ひ

同分

塩硝　百目　硫黄　四十五匁　灰　十匁　樟脳　十匁

肥松杉　廿匁　蓬艾杉　十匁　龍脳　二分　指樒　二匁

鼠糞　六ツ

右調合してこまかに篩ふつきこまは指て二度篩ふようにすべしよくもみ

かためらるべき

蓬艾　十匁　奉書紙のこまかに切て十匁　塩硝　五匁

右一つに入てよくもみ煮汁にひたして用ひ

天松明乃ち松明よりはづすこの長さ二尺ばかり

巻りにして漆よりもちんとうかかへ煮てしてて

長さ引てよくもみて松明よりたゞちに壺に入れ松

明一丁ばかりにて三里ハ行べきなり

陣小屋をこしらへ事御陣小屋ありしかへ

ともはなれたるにたいしてこしらへ

つよくこしらへこまかに用ひて合せ片のこしらへまで三

枝ハ二尺の切作りにして六つ一枝の切作日すべ

て四つまで八尺也小屋の面ハ竹にて作り

に加け俵乃たること竹にて作り表後のこと板にて

ゆく則ゆいて色糸ハ色こまかに引紙に方もと

うゆ又ハうこと紙幕よりてこの重ハ五斗ハ右の人

まて八畳敷まるけ小屋ハ内ハ長板も四方

ちこしらへいけば板にて小屋とこしらへハ別

けを板にこしらへ長板よりはなれ風あづる

こめ四方よりこの方ハ打こ則ハ重よりあり一方

こめ乃小屋こしらへ乃ち侍貴の者よりこしら

隠綱の事紙よりは綱ハ野陣小屋のけの時こしら

乃徳俵ほけ紙ばかりなるべし常ハ土中ようづこ
ひけで平地より八九すのこるをこれ引ちらせんん
あいハ土場より新でていくらとでものぞみ次第
網のうへのうへ竹の沓引紙ろくばかり
く絵中よりわり口伝

馬歯糞

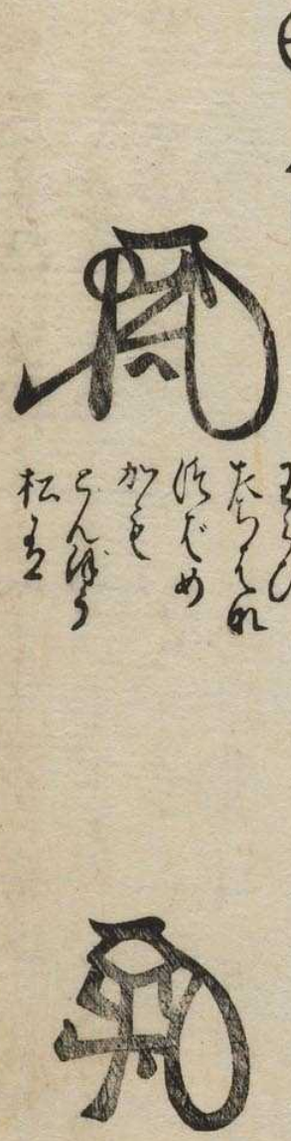
るへ人ハ冷或ハ酒にてこれ不よ此薬ハ男女ともに
馬糞大　鼠糞中　婦人の月水ひとしてて
ちちさハかりけよへなるもてうくめり黒焼ようて
ぞうの沈すて移りて移りて移りてうん又ちかくすりあるう

日金業

松原よとへ人沈みて移りて移りて移りて移りて
やすすりけりく業ハ口伝
軍の網乃事沙汰ハ軍陣の多紙沙汰ちちいつち

中ちちめてあいちてこと用ふ或ハ紙の
中よちちちちちぶハかりまてあいちちひへ紙
ち車網のあちりのあちりさ少へよ用ふ紙よ
上ち紙ちりちりまちりまちりまてひちへちくへし
此判形ハ作の鍛代ての判ちちちの乃手数長
乃事なる所とハ書よ大分ち紙侍貴之巻よん
えちちり

伊勢駿河守判形



伊勢国桑守貞仲判形

照心加賀入寺貞直判形

伊勢尤京亮 次郎九郎門尉 貞泰判形

伊勢下総守貞房判形

伊勢国懐守貞成判形 尤京亮

伊勢駿河守照安判形

伊勢力上野介貞弘判形

是ハ照安ヨリ傳ヲ作ス近代ハ我一流ヲ作上也

京沼田上野介判形

糸大坪 此判ハ大坪ノ鞍ニ有 道禅判形

伊勢上野介判形

伊勢守貞宗判形

醫師ナト云タ是ニ此判形ヲ作ル傳也

伊勢駿河守判形

国懐守伊勢キヨウ院判形

伊勢因幡守判形

伊勢上野介判形

伊勢六郎左衛門尉判形

ホウレン院判形

伊勢国備守判形

沼田道安判形

奈良尾左京亮判形

沼田勘解由判形

大和宗玄判形

淀藤左衛門判形

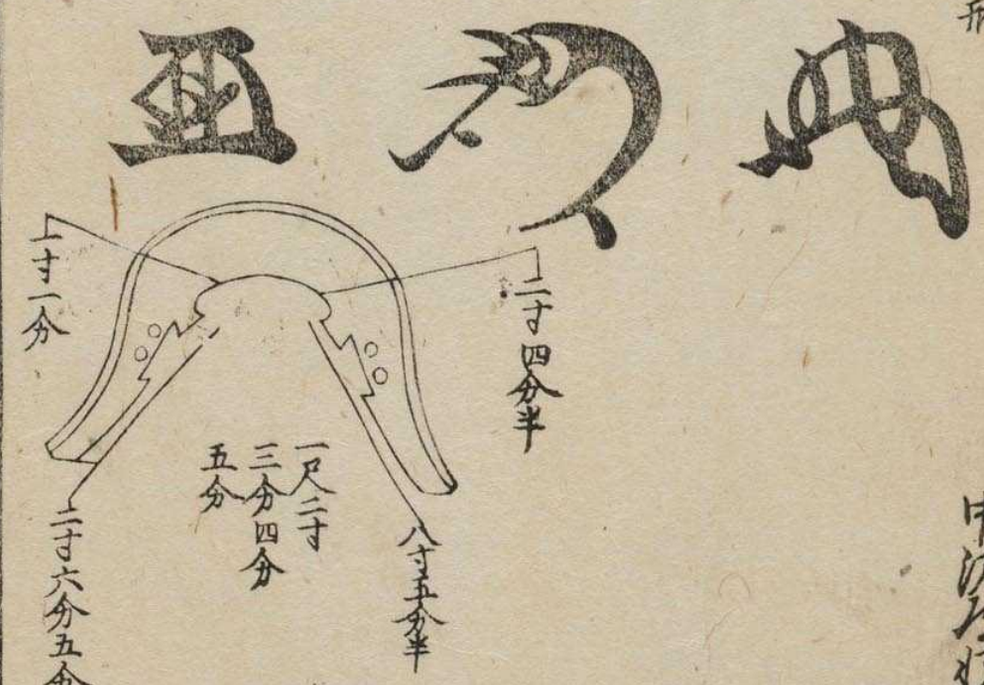
源判

大和一葉判形

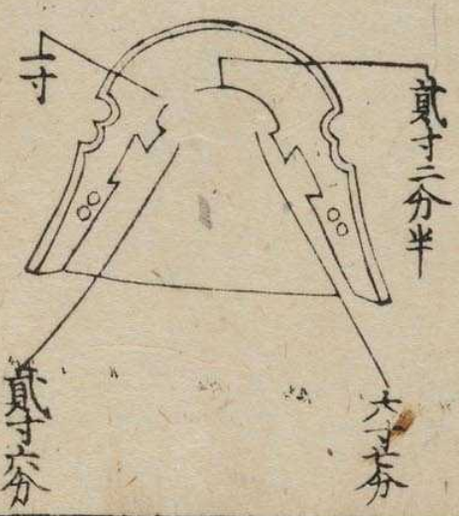
伊勢守判形

井関判形

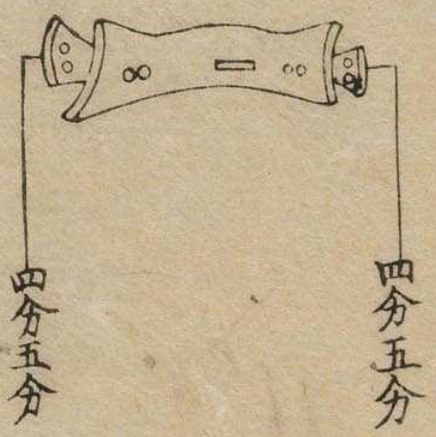
同判

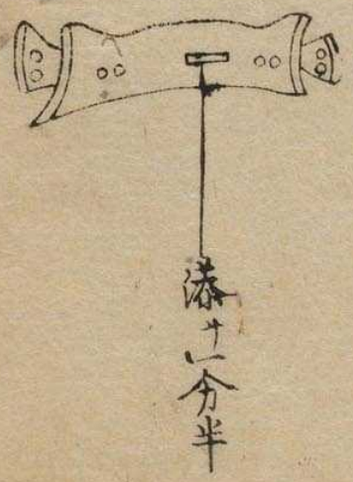


中沢多左衛門重綱判形



ちがいの間
さ巾一尺九寸但一寸一分ずつ
九分
長いさの間一寸八分但九分より二寸まで



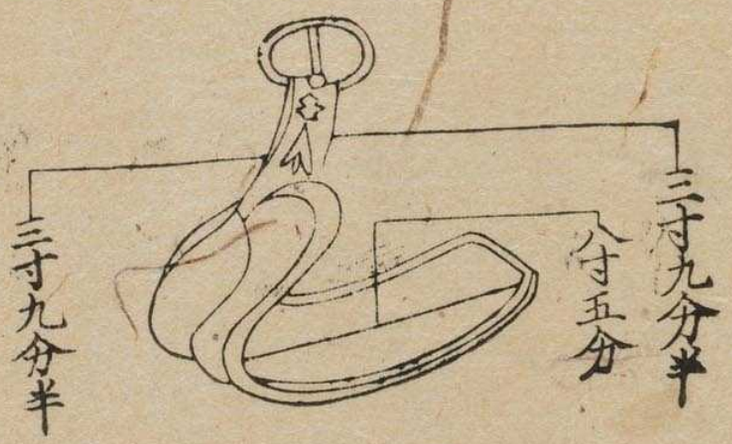


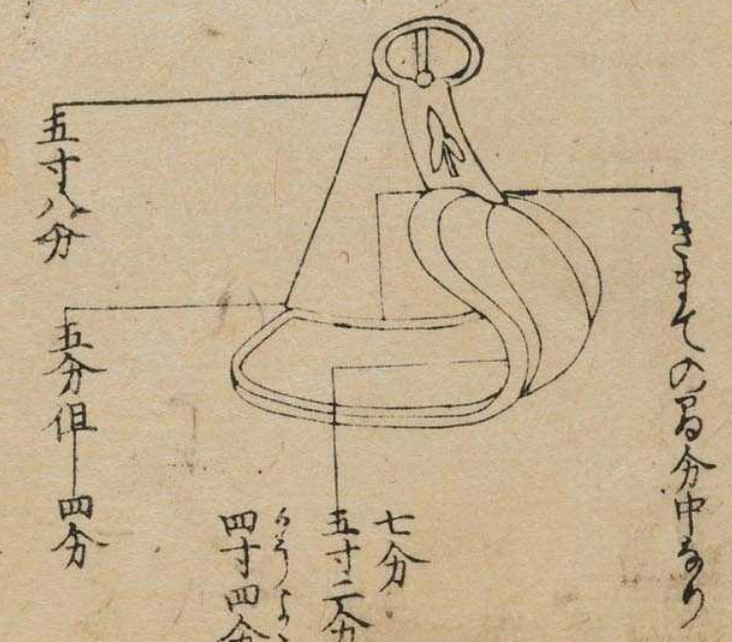
宝暦十一辛巳五月中旬吉日求之

祐源幾右衛門

信友

要馬秘極集巻之四





哺用之巻終